

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム（2001）2巻2号:46-48.

ペピニエール ある外科医学校の物語 医学史の窓から

鮫島夏樹

エッセイ

ペピニエール：ある外科医学校の物語

医学史の窓から

鮫 島 夏 樹

明治維新以来、従来の漢方医学を改め、西洋医学を取り入れてきた我々は、西洋医学の歴史のなかで医者
の身分に奇妙な差別があることを知りました。古代ギリ
シヤ・ローマ時代以来のヒポクラテスに代表される
ほぼ10世紀間にわたる西洋医学は、中世に入ってキリ
スト教の教条的象徴的世界観（例、「教会は血を忌
む」1163年、トゥールの宗教会議）のもとで、外科学
は内科学と事実上分離され、外科的処置は卑賤の手職
人の業として大学では取り扱われず、日常の外科治療
は身分の低い理髪師外科医（理髪師の身分でその道に
通ずるもの）の手にゆだねられました。しかし皮肉な
ことに、相次ぐ戦乱の増加とともに戦時における傷病
兵に対する外科的処置の重要性がいやおうなしに認識
されるようになり、18世紀に入ってこれら理髪師外科
医の質的向上を図って、各国で外科医学校が創られる
ようになりました。18世紀中葉の代表的なものにプロ
イセンの外科医学校（1724）、パリの王立外科アカデ
ミー（1731）その他があります。これらのうち、わが
国と関係があるプロイセンの外科医学校の後身である
ペピニエール（外科医養成所）について、ディープゲ
ンの著書（Diepgen, P. : Medizin u.Kultur,1938）に基
づいて紹介しましょう。

ヨーロッパでは実に19世紀初頭にいたるまで、外科
治療は実際的にはさまざまな階級の、医者ではないが
多少とも医術の心得がある、いわゆる理髪師外科医の
手で行われてきました。当然、戦場における傷病兵の
看護は、軍医官（大学で正規の医学教育を受けたが実
際の外科処置は行わなかった）の監督下で、軍に雇用
された理髪師外科医から昇進してきた者や、何らかの

方法で職人的に育成された者が行いましたから、その
治療はまだ原始的で結果は悲惨なものでした。プロイ
センでは彼らの水準を高めようと、1724年、外科医学
校（Collegium medico-chirurgicum）を設立しまし
たが、入学生は正規の学問を受けていない貧しい階層の
若者たちでしたので、成果が得られないまま空しく4
分の3世紀が過ぎました。1795年、フリードリッヒ・
ヴィルヘルム・二世のもと、軍令部つき医官のヨハ
ン・ゲルケ（J. Goercke、1822年死亡）は諸外国で
の調査旅行による観察や実際の戦場での厳しい経験か
ら、単に必要な技術を有しているだけで学問の進歩を
吸収できる基礎教育も能力もなく、軍事衛生その他に
関する低級な基礎的知識すら持たない理髪師外科医で
はまったく役に立たないことを思い知らされました。
そこで彼は基礎的教養の重要性を踏まえ、抜本的改革
を決断し、外科のみならず内科学をも教える「ペピニ
エール（Pépinère）」（外科医養成所）を創設しまし
た。この外科学と内科学との統合はきわめて意義のあ
る出来事であり、2、3の洞察に富んだ医者しかその
不可欠性を認識せず、大多数は反対であった当時とし
て画期的なことでした。同時に、ここに理髪師外科医
の時代が事実上終焉を告げ、外科学ないし外科医の地
位が内科医と同等のものになる機運が作られました。
同様な事情から、隣国のフランスでも1794年、王立外
科アカデミーを廃し、新しい軍医学校である衛生学校
（École de santé）をパリ、モンペリエ、スタラスブ
ールに設立しました。

ペピニエールに入学してくる学生は、貧しい家庭の
出が大部分で、エリートコースとも言うべきギムナジ

ウムを経て大学に進む道を選べない者たちでした。しかし彼らに対する本施設のエデュケーション計画がいかに堅実かつ多面的であったかには驚くべきものがあります。教育プランは医学および自然科学のすべての理論的・実際的分野にまたがっているばかりでなく、語学、政治および文化史、医学史や技術史、哲学、心理学および医者倫理などの精神科学分野における必修および選択科目が見出されます。ギリシャ語すら、将来の医者にとって非常に重要な言語の知識が必修でなくなった後でも、学ぶことができました。このような基礎的一般教養の意図は、1827年以降、入学時に大学入学資格が必要とされるようになった後も、本養成所の特徴的個性として維持されました。

教師たちはペンより行動の人だったようです。創設にかかわった最大の人物ゲルケ（彼は負傷者の輸送方法に関する小パンフレットしか残していない）、シャリテの教授で外科医のムルシナ（G.L.Mursinna、1823年死亡）、ゲーテの友人で「医戒」の著者としてわが国でも知られているフーフェラント（C.W.Hufeland、1836年死亡）その他から、かのドイツ特有なロマン主義全般の時代にあつて、学生たちは健全な実地医療の教育を受けるとともに、学問的な時代思潮にも注意が喚起されました。本養成所（ペピニエール）が新しい教師陣を獲得した1818年以降、軍医のための「フリードリッヒ・ヴィルヘルム研究所」と改称されてからも、ヨハネス・ミュラーの師で解剖学者・生理学者のルドルフィ（K.A.Rudolfi、1832年死亡）、外科医であり近代細菌学以前の優れた疫学者であったルスト（J.N.Rust、1840年死亡）、著名な外科医グレーフェ（C.F.Graefe、1840年死亡、眼科医グレーフェの父）、ジフテリア桿菌の研究者で著名なF.L.レフレレル（F.Loeffler、1876年死亡）らが直接の上司として指導しました。優れた指導者による教育の果実は特に19世紀中葉以後に見事に開花し、ひいては医学のみならずドイツ科学全体の目覚ましい興隆の一翼を担うことになります。

このような教育方針、特に医学をもつば自然科学的の基盤に基づかしめる試みは、当時のドイツではロマン主義全盛の時代、また一方では、麻酔も防腐法もなく現実的に無力な医療に対する失望から虚無的な空気が漂うなかにあつて、「生理学的医学」とか「合理的医学」などの標榜は医者たちから少なからぬ失笑を招いたようです。しかしこのような風潮に敢然と抵抗した人物が本養成所（「フリードリッヒ・ヴィルヘルム研究所」と改称されていた）の学生ヴィルヒョウ（R.Virchow、1821～1902）その人でした。1845年5月、彼はまだ24才にもなっていませんでしたが、創立者ゲルケの誕生日の記念講演に「機械的見地から見た医学の必要性と正当性について」、同じ年の8月に「医学と自然科学との統合の必要性について、いわゆる静脈炎を例にとつて」を発表しました。当時、それが細胞病理学の誕生の歴史的瞬間であったことをほとんど誰も気付きませんでしたし、両論文いずれも医学雑誌への掲載は拒否されました。

ペピニエールの後身であるフリードリッヒ・ヴィルヘルム研究所では、より以上の教養を積むために優秀な学生は国内の学問や医療技術の指導的施設に派遣されることが慣例になりました。こうして本施設に学んだ者たちから現代医学の基礎を築いた偉大な先人が驚くほどたくさん輩出しました。名前を挙げれば、前述のヴィルヒョウのほか、ヘルムホルツ（H.Helmholz、生理学者、物理学者、検眼鏡の発明者）、シュルツェ（W.A.Schultze、防腐法の普及に努めた外科医）、ライデン（E.Leyden、有名な神経病学者）、ノートナーゲル（H.Notnagel、当時の最も優れた臨床家の一人）、レフレレル（F.A.Loeffler、衛生学者、細菌学者で、馬鼻疽菌、鼠のペスト菌などの発見者）、ベーリング（E.Behring、細菌学者、第1回ノーベル賞受賞者）、マルチウス（F.Martius、近代体質病理学の創始者）、ガフキ（G.Gaffky、細菌学者）、その他多くの先人が、ここに学び、育ち、さらに飛躍していった人々です。

本研究所の教育および設備が模範的であると喧伝さ

れるにつれ、世界各国から衛生将校らが視察や研究に訪れるようになり、日本からも例外ではありませんでした。日本が西洋医学を取り入れるに当たって、明治維新の際にイギリス、フランス、オランダあるいはアメリカの医者非常に世話になったにもかかわらず、あえて範をドイツ医学に求めた理由には諸説がありますが、本研究所の存在とその重要性の認識が一つの大きな要因になったと思われます。森鷗外も陸軍衛生将校としてドイツ留学時代の1887年、当時の陸軍軍医監、石黒忠憲(ただのり)らと本施設を視察しています。

「フリードリッヒ・ヴィルヘルム研究所」はその後1895年に「カイザー・ヴィルヘルム・アカデミー」と名称を改め、1919年ヴェルサイユ条約によりいったん解消されましたが、1935年に再興されて「ベルリン軍医アカデミー」となり、1945年まで存続しました。

以上、外科学の歴史上重要で、教育的にも示唆する

ものが多いと思われる「ペピニエール」という軍医学校というよりも外科医学校の変遷を、ディーブゲンの著書を借りて紹介しました。ペピニエール設立までの経緯やそのカリキュラムにも表れている教育理念は、悲しむべきわが国の現状に多くの示唆を与えるものと思われます。一般にはベルリン軍医学校と記載され、その軍人的な立場が本来自由であるべき医者職業と調和しない感じを与えるかもしれませんが、本書を読む限り、「ペピニエール」から「カイザー・ヴィルヘルム・アカデミー」にいたるまで、幾たびか名称を変えたとはいえ、ペピニエール以来の伝統的な教育方針は、普通の大学となんら変わりなく、すこぶる自由かつアカデミックであったようです。施設の入り口に掲げられた標語は、Scientiae, humanitati, patriae! (学問、人類、祖国のために) でした。

(旭川医科大学名誉教授・外科学)

表紙解説

ビッグバンから時を経て形成された銀河と中心部に吸いこまれていく講座名、それに連なる雪の結晶を描いてみました。雪は、本号の特集企画「寒圏医学・寒圏看護学」から連想したモチーフです。

水色と赤の雪の結晶に、どのような感覚をもたれたでしょうか。

一つの銀河には平均して数千億の恒星が含まれると言われており、個々の恒星はその誕生から消滅まで段階的に変化していくと考えられています。その変化とは、恒星内部の核融合による放射エネルギー(表面温度)の高低であり、高いほど青みがかかった色、低くなるにつれて赤みを帯びてきます。身近な例では、ガスの炎は青、白熱電球は黄白、ロウソクの光は赤に見える現象を考えればわかりやすいかもしれません。

一方、美術書に「暖色系(暖かく感じる)と寒色系(冷たく感じる)」という用語を目にすることがあります。暖色系の色は赤・オレンジなどであり、寒色系は青・水色などがあげられます。これは、先ほどの恒星の表面温度(色)とは丁度、逆の関係になります。

そのようなことを考えながらこれらの雪の結晶を見つめていると、冷たいような熱いような、不思議な感覚にとられるのでした。

整形外科学講座 今井 充